



写真1 砂丘調査の様子(昭和50年頃)

地名「十八石」のなぞ

目名瀧の野球場は、かつて写真1のような砂山でした。当時の沢目中学校3年生は協力して地域を調査していましたが、その一部に砂だけで出来ている丘、つまり砂丘の調査もやっておりました。写真1の左上に写っている中学生の足元には厚い砂が積もっています。その足元から約2m下にやや硬い部分(写真1 矢印の部分)があり崩れにくくなっています。そのため上から落ちてくる乾いた砂が滝のように流れ落ちる様子が見られます。

調査地域もしいに広がっていき、田中集落付近を調べていた生徒グループがその西方にあるゴルフ場付近に「十八石(じゅうはちこく)」という地名があることに気づきました。その由来を調べていたところ「そこに1本が18石(木材の体積の単位)もある大木が生えていたので、その地名となった」という情報を得ました。生徒たちは早速現地を調べてみましたが、そのような大木も伐採された痕(あと)もみられませんでした。

不思議だ。変だ。と思っていた頃、生徒の一人が「この地域の田んぼから米が18石とれたから付いた名前である」という情報を持ってきました。しかし、付近一帯は砂ばかりで田んぼは見当たりません。そこで生徒たちは「砂の下に田んぼがあるのではないか?」と考え、スコップで砂を掘りはじめました。約1.5m掘りましたが、残念ながら田んぼは出てきませんでした。

そうしているうちに、ある生徒がすごい情報をもってきました。「Mさんの家(十八石に新築)で

井戸を掘ったら5mほど下から稲株が出てきたことがある」というものでした。この話に生徒たちは興奮しました。砂山の下に田んぼがあったのだ!!と。

その後、秋田大学や当大学の卒業生たちがグループをつくり、砂丘の調査が続行されました。そして砂丘の分布状態や、砂丘が形成された年代などが次第に明らかになってきました。それらの結果から、十八石にあったはずの田んぼは室町時代〜江戸時代にかけて砂で覆われてしまったと考えられています。



写真2 鳥形駅より「十八石」方面を望む

写真2は鳥形駅から十八石方面を撮ったものです。手前に広がる田んぼを眺めていると、さらにその西側にあったはずの田んぼが砂によって次々と覆われていったものと思われまます。その様子を、当時にここで生活していた人々はどうな気持ちで見っていたのでしょうか。

八峰白神ジオパーク

推進協議会

会長 工藤 英美

八峰白神ジオパーク推進協議会

秋田県山本郡八峰町

峰浜田中野田沢20-1 峰栄館2階

TEL 0185-70-3881